

Title	Dickens and Sleep(Abstract_要旨)
Author(s)	Watanabe, Tomoya
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2014-11-25
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k18633
Right	許諾条件により本文は2015/01/01に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

京都大学	博士（文学）	氏名	渡部 智也
------	--------	----	-------

論文題目	Dickens and Sleep（ディケンズと眠り）
------	-----------------------------

（論文内容の要旨）

「夢は小説の中ほど、現実で大きな役割を果たしているとは思われませんわ。」これは、イギリス19世紀を代表する作家の一人、ジョージ・エリオットの言葉である。この言葉が端的に示しているように、19世紀の写実的な作家たちは、夢や眠りは、現実世界をリアルに描く自分たちの作品にはふさわしくない、と考えていた。その中で、例外的な存在がチャールズ・ディケンズである。ディケンズは眠りや夢に強い関心を示し、それらの事象を積極的に作品の中で用いていたのだ。しかしながら現状、ディケンズ作品に描かれる眠りや夢の研究には、2つの問題点がある。第1に、作品に描かれる夢の描写の研究は、その多くが精神分析的な見地に立つものに限られているという点、第2に、眠りの描写に関する文学的な研究がほとんどなされていないという点である。批評家ジョン・コズネットが指摘しているように、ディケンズは夢だけでなく、眠りにも非常に強い興味を持っていた。そのもっとも典型的な例は、最初の長編作品『ピクウィック・ペーパーズ』（*Pickwick Papers*）に登場する太った少年ジョーの描写であろう。彼の奇妙な眠り癖の描写は、後にピクウィック症候群と命名されるところの睡眠障害の描写であることが明らかになった。この事実は、ディケンズが作家として初期の段階から、眠りや夢といった事象に注意を払って作品を執筆していたことを示している。本論文の目的は、ディケンズの眠りや夢への関心が、彼が作品を執筆する上でどのような役割を演じたかを、複数の作品に描かれる眠りと夢の描写の考察を通じて明らかにすることである。

Chapter 1. Sleep in *Oliver Twist*

ディケンズが最初に眠りを本格的に用いたのは、長編小説2作目に当たる『オリヴァー・ツイスト』（*Oliver Twist*）である。本作には、主人公の少年オリヴァーが移動のたびに眠り込み、その都度体力気力を回復して生き延びる、というパターンが存在している。また、その移動が善の世界から悪の世界への移動、あるいはその逆といった、象徴的な意味合いを帯びた大きな移動の場合は、決まってその眠りの描写には、**deep**のような、眠りの深さを表す形容詞が用いられている。これらの事実から、ディケンズが意図的にオリヴァーの眠りを描いていると推察出来る。彼自身が序文の中で述べているように、この小説の目的は、「逆境の中を生き抜き、最終的に悪に勝利する善」を描くことにあり、その目的を果たす上で、ディケンズが眠りを利用していると言えよう。

一方、悪漢サイクスもまた、その眠る姿がたびたび描かれる人物であるが、オリヴァーの眠りが**sleep**を中心とする単語によって表現されているのに対し、サイクスの眠りは、**slumber**, **doze**, **nap**といった、浅い眠りを意味する言葉によって表現されている。コンコードダンスを用いた分析によると、ディケンズはエリオットなどの他の同時代作家に比べて、非常に多彩な眠りと関わる言葉を使い分けている。従って、オリヴァーとサイクスの眠りの描き分けは、両者を差異化するというディケンズの意図を反映したものだと考えられる。そのサイクスは、思い違いから、自らを慕う情婦ナンシーを殺害したことをきっかけに、逆に眠りを失っていく様が強調して描かれるようになり、最終的には死に至る。

また、作品の悪を体現する存在であるフェイギンは、全く眠る姿が描かれることがない。さらに、単に眠りの描写が存在しないだけでなく、眠る登場人物と同時に登場し、相手の眠りを利用して自ら利益を得る様が描かれている。その典型例は、眠るノア・クレイポールを利用することで、サイクスにナンシー殺害をけしかける場面の描写である。このように、他者の眠りを利用して様々な悪事を働くフェイギンではあるが、最終的には死刑判決を受け、牢獄に入れられる。そして訪問してきたオリヴァーに対して、「自分が眠っていると言えば（牢の）外に出してもらえる」と述べる。初めて自らの眠りに言及したこの台詞は、眠りを

得る姿の描かれることのない、悪を体現するフェイギンの、眠りを頻繁に得る善の象徴的人物であるオリヴァーに対する敗北宣言に他ならない。

このように3名の登場人物の眠りと不眠の描写を考察することで、ディケンズが、自らの作品テーマを際立たせるために、眠りと不眠を巧みに使い分けていることが明らかとなる。

Chapter 2. The Quest for Sleep in *The Old Curiosity Shop*

『骨董屋』 (*The Old Curiosity Shop*) は、ディケンズ作品の中でももっとも眠りや夢に関する描写の多い作品である。そしてこの作品は、ディケンズのみならず、同時代の他の作家の作品と比較しても、群を抜いて眠りや夢への言及が多く、眠りに取り憑かれた作品であるかのような印象すら受ける。これは、主人公リトル・ネルの眠りや不眠への言及が非常に多いためである。そして彼女の眠りと不眠には、非常に興味深いパターンが存在する。この物語は、ネルの旅路を中心としたものであるが、彼女は、祖父の経営する骨董屋で当初得ていた良い眠りを失い、その後行く先々で眠ろうとする。しかし、その都度何らかの事情で眠りを失い、再び移動し、新しい場所で眠る姿が描かれる。すなわち、本作品は、主人公ネルの、「失われた眠りを求める旅路」と読むことが可能なのである。この問題を考察していくことで、彼女は、金貸しキルプ、パンチ・アンド・ジュディの人形遣いコドリンとショート、さらには、ギャンブル狂となった自身の祖父や、逃亡中に出会う男たちによって、眠りを奪われていることが分かる。そしてその描写から、彼女が眠りを失う要因となっているのは、彼らが彼女を性的なまなざしで見つめているためだということが窺える。最終的に、彼女は何人も自分を性的な存在として見つめることのない、最果ての村にたどり着き、その場所で、子供のまま、まるで眠るように亡くなる。

このような形でネルの眠りが描かれるのは、彼女のモデルが、ディケンズの義妹メアリー・ホガースであることに起因している。メアリーはディケンズの妻キャサリンの妹であるが、ディケンズ自身、彼女のことを憎からず思っていた。しかし、彼女は突如として病に倒れて亡くなってしまった。状況を考えれば、ジャック・リンジーやピーター・アクロイドが述べているように、ディケンズが、自身の不義の想いの罰として彼女が突然亡くなったのだと考えたとしても驚くには値しないだろう。ディケンズは彼女の死後、毎日のように彼女を夢の中で見ており、ディケンズにとって彼女と眠りは密接に結びつく存在であった。罪の意識にさいなまれた彼は、作品中に彼女を体現する究極的に無垢な存在としてのリトル・ネルを生み出し、彼女を誰からも性的に脅かされることのない、永遠の眠りへと封じ込めることで、彼女に対する償いをしようとしたのである。

これまでも、ネルとメアリーの類似、さらには彼女を追いつめるキルプとディケンズの類似に関する指摘はなされてきた。しかし、作品の眠りに着目することで、キルプだけでなく、多くの男性登場人物が、彼女を性的に脅かす存在として描かれていることが分かる。このことから、『骨董屋』という作品の背後には、従来考えられてきた以上に強い、ディケンズのメアリーへの愛と、そのような想いを抱いたことへの自責の念が渦巻いていることが明らかになる。

Chapter 3. Sleep and Sleep Deprivation in *Barnaby Rudge*

『バーナビー・ラッジ』 (*Barnaby Rudge*) は、ディケンズが初めて書いた歴史小説である。この作品についてあまり知られていない事実は、この作品が、実はディケンズ作品の中でも2番目に多く、眠りや夢への言及がなされる作品だということである。前作『骨董屋』は、ネルのモデルであるメアリー・ホガースへの想いが、その大量の眠りの描写の主要因となっていたが、本作においてはメアリーの影を見いだすことは出来ず、ディケンズがメアリーとは別の理由で、作品中に頻繁に眠りを描いていることが窺える。

本作の登場人物、ジョン・ウィレットやゲイブリエル・ヴァーデン、バーナビー・ラッジ、ヒュー等の眠りの描写を考察すると、物語前半、暴動が起こるまでは、彼らの眠りが頻繁に描かれ、しかも、その描写がそれぞれの登場人物の特徴をよく反映し、読者の注意を巧

みに引きつけている事が分かる。しかし、ひとたび暴動が勃発するとこれらの描写は失われ、逆に人々が眠りを得られない描写が中心となる。上述の登場人物のみならず、一般人や他の様々な登場人物から眠りが奪われる様が描かれ、さながら世界中から眠りが失われたような印象すら受ける。しかも、その眠りを奪う描写（断眠描写）には、「目覚め」のイメージが付与されているのだ。そして暴動が収まると、今度はふたたび彼らが眠りを取り戻す様が強調して描かれている。これらの事柄から、作品の眠りと断眠の描写には、2つの役割が存在することが導き出せる。1つは、ゴードン争乱を中心とする暴動への強い批判である。医学的観点から、眠りの重要性が実証されたのは20世紀末であるが、ディケンズが生きた19世紀においても、眠りが人々の生命を維持する上で不可欠であり、逆に眠りを奪うことは、死につながると考えられていた。ディケンズはこの断眠という暴力を暴動に当てはめることで、暴動を批判しようとしていたと考えられる。眠りの描写と、目覚めの意味合いを帯びた断眠描写のもう1つの役割は、歴史の流れを眠りと目覚めのリズムにあてはめることで、歴史が循環する可能性を示唆することである。繰り返しを起こしながら、少しずつ前進していく歴史の有り様を、ディケンズは眠りと断眠の描写を用いることで表現していたのである。

Chapter 4. Dreams in *Little Dorrit*

『バーナビー・ラッジ』以降は、いくつかの作品において興味深い夢の描写が見られるものの、個別の事例が多く、作品全体としてみた場合に重要な役割を果たすものはほとんどない。そのような作品が多い中で、例外的な位置を占めるのが『リトル・ドリット』（*Little Dorrit*）である。この作品では、非常に高い頻度で夢の描写があらわれているのだ。

この作品においてディケンズは、初めて2種類の夢を巧みに用いている。dreamという言葉には、「眠っているときに見る夢」と、「目覚めているときに見る夢」（白昼夢、夢想など）の、大きく分けて2つの意味が存在する。これまでディケンズは、前者の意味でこの言葉を多用する一方、後者の意味で用いることはあまりなかった。しかしこの『リトル・ドリット』では初めて積極的に後者の意味を多用している。そしてその目的は、登場人物がそれぞれに精神的な牢獄にとらわれている様を強調することである。アーサー・クレナム、アフェリー・フリントウィンチ、ウィリアム・ドリットらの夢の描写を考察することで、彼らが夢という名の牢獄にとらわれていることが窺える。そして、最終的に現実を直視することを選んだアーサーとアフェリーは生き残り、最後まで夢を捨てられなかったドリット氏は亡くなることになる。一方これらの人物と対照的に、リトル・ドリットは常に現実を見つめ、その姿勢は、彼女の眠りの描写にもあらわれている。彼女は眠っているときでも、辛い現実を忘れないのである。最終的に彼女はアーサーと結婚し、二人は雑踏の中に出て行くところで物語が終わる。一部の批評家は、他作品と比較してこの終幕が暗いことから、二人の将来を不安視している。しかしながら夢という要素に着目することで、このエンディングの描写は、二人が現実を直視する生き方を選んだことのあらわれであり、それによって二人が今後、夢という監獄にとらわれることがない、という明るい未来が示唆されていることが読み取れる。

このように、本作品は夢の描写、とりわけ、これまでディケンズがあまり用いてこなかった、目覚めているときに見る夢の描写に満ちている。そしてその原因は、この小説の執筆背景にある。ディケンズがこの小説のアイデアを考えていたとき、ちょうど彼の夢と関わる出来事が立て続けに起こった。その中でも彼にもっとも強い影響を与えたのが、かつての恋人マライア・ウィンター（旧姓ビードネル）との再会である。彼女からの手紙をもらったディケンズは喜び、彼女に対してDreamという言葉強調した手紙を送り、再会を心待ちにする。しかし彼は、再会した彼女のあまりの変わりようにひどく幻滅してしまう。つまり自分のかつての夢と、その夢への幻滅という意識を強く持った状態で書き出したのが、この『リトル・ドリット』なのである。従って、本作に見られる夢の描写と、その夢から最終的に脱却する主人公たちの描写は、ディケンズが本作において、自分自身の昔の夢との決別を宣言しようとしていたことを示しているのである。

Chapter 5. Dickens and “Sleep-Waking”

ここまで第1章から第4章において、ディケンズが眠りや断眠、夢といった事象を巧みに用いて作品を構築してきたことを明らかにした。この章では、それに加えてもう1つ、これらとは別の形でディケンズの創造性に寄与した可能性のある要素として、半醒半睡、すなわち、眠っているとも目覚めているともつかぬ中途半端な状態の描写を取り上げる。

ディケンズの作品の中で、重要な意味を持つと思われる半醒半睡の描写は3つある。『オリヴァー・ツイスト』のオリヴァー、『リトル・ドリット』のアフェリー、そして『エドウィン・ドルードの謎』 (*The Mystery of Edwin Drood*) のジャスパーの描写である。これらの描写には大きな共通点がある。それは、「彼らがこの状態で必ず何か重要なものを見る」、ということだ。この共通点は、ディケンズが、半醒半睡状態で重大な何かを見ることが出来る、と考えていたことのあらわれと言える。実際、このような事象は小説の中だけにとどまらず、ディケンズ自身が、特にジャスパーのそれと類似するような意識の状態で、執筆活動を行っていたという証言が存在する。このことから、ディケンズがこの半醒半睡状態で、執筆のインスピレーションを得ていた可能性が浮上する。

この考え方は、ディケンズの挿絵画家の一人でもある、ロバート・ウィリアム・バスの絵画『ディケンズの夢』 (*Dickens's Dream*) にも見られるものである。一見荒唐無稽に思われるかもしれないが、手紙などの当時の資料や、同時代人の証言、批評家の論評等を考察することで、この絵がディケンズの創作過程をある程度忠実に写したものであり、時に半醒半睡が彼の創作プロセスの中で重要な位置を占めていた可能性は否定できないと分かる。

以上の考察により、2つのことが導き出せる。1つは、ディケンズ作品において、眠りや夢がそのきわめて重要な構成要素であるということ、そしてもう1つは、半醒半睡という特殊な眠りの状態が、作家ディケンズの想像力と密接な関係にある可能性が高い、ということである。序論において、彼は初期の頃から眠りに興味を持っていたと述べたが、逆に言えば、ディケンズは自らの想像力につながるこの不可思議な状態をより良く理解し、それによって自身の想像力をコントロールするために、眠りや夢に強い関心を払うようになった、と言えるかもしれない。ディケンズにとって、眠りを理解することは、彼自身を理解することにほかならなかったのである。

(論文審査の結果の要旨)

1844年スイスに滞在していたディケンズは知人エミール・ド・ラ・ルーから、不眠症に悩み痙攣や頭痛をともなう彼の妻の神経障害について相談を受ける。ディケンズは夫人に催眠術をかけて眠らせ、さまざまな質問をする。そして彼女が奇妙な悪夢に悩まされていることを知ると、自由連想を用いて無意識の思考を言語化させ、その悪夢の意味を認識させることによって病の根本を取り除こうとする。このようなセッションを何度か繰り返した後、夫人の症状は(一時的にはあったが)軽減する。フロイトがウィーンで開業する40年前に既にディケンズは精神分析医としてセラピーを行っていたのである。

このエピソードが示すように、ディケンズは夢が人間の精神生活において持っている意味や、その重要性に関して深い理解を有していた。したがって、彼の作品には夢そのものの描写のみならず、夢に関連する洞察に富んだ記述が多数見受けられる。『マーティン・チャズルウィット』において、ティグ・モンタギューが自らが殺されるのを予知する夢を見るくんだりなどその代表的な例であろう。当然批評家は早くからこの種のパッセージに着目し、既に多くの研究書や研究論文がこれについて発表されている。しかしながら、本論文において渡部智也氏は、これらの先行研究には二つの問題点があると主張する。これまでの研究はもっぱらフロイトの流れを汲む精神分析に依存してきたこと、ならびに、夢と切り離せない「眠り」については全くと言っていいほど研究がなされてこなかったこと、の二点である。なるほどこの指摘はもっともである。たとえば、処女小説『ピクウィック・ペーパーズ』に登場する、放っておくとすぐに寝てしまう**The Fat Boy**というキャラクターの行動は実は睡眠異常の一つの症例を正確に描写したものであり、後にこれがピクウィック症候群と名づけられるという事例があり、医学的な見地に基づく研究は僅かではあるが存在する。ところが、ディケンズ作品中に見られる「眠り」を文学的な観点から包括的に考察しようとしたモノグラフは前例がない。今日ではディケンズ研究に新しい視点を導入することは極めて困難であるから、本論の独創性は高く評価されて然るべきものである。

本論の考察が導き出したすぐれた成果を以下にいくつか挙げる。『オリヴァー・トウィスト』は無垢なオリヴァーと邪悪なフェイギンを軸にした道徳的メロドラマであるが、第一章で論者はこのテキストに「眠る」オリヴァーと「眠らない」フェイギンという対立が織り込まれ、これが作品の意味形成に寄与していると指摘する。物語の結末でオリヴァーが死刑執行を待つフェイギンを監獄に訪ねる時、フェイギンは「俺は眠ってる、と看守に言ってくれ。その隙に一緒に逃げよう」と不思議な科白を口にする。この科白は今までほとんど研究者の注目を受けなかったし、言及されたにしてもせいぜい気がふれている老人の奇妙な戯言として扱われてきた。ところが論者は、このフェイギンの科白には、初めて自分と「眠り」を結びつけることによって、これまでずっと「眠り」をテキスト中において体現してきたオリヴァーにフェイギンが屈服する、すなわち「悪」が「善」に対して敗北を宣言するという道徳的含意が認められるとする。これは創見であり、説得力を持つすぐれたテキストの読みである。

『骨董屋』の主人公トル・ネルは「眠る」ように死ぬことでヴィクトリア朝文学において読者から最も多くの涙を絞り取ったキャラクターである。その彼女は頻繁に男性によって「眠り」を妨げられる。第二章で論者はこの現象を性的な意味を持つものとして解釈し、それをディケンズと夭折した義妹メアリー・ホガースの関係に結びつける。たしかに従来からメアリーをネルのモデルとする考え方は存在す

るのだが、本論はそこに「眠り」の要素を付け加えることで、ディケンズがメアリーの死後毎晩彼女の夢を見ていたという有名な告白に独自の解釈を加え、ディケンズの抑圧された願望を新たな角度から照らし出している。論者の読みは決して一本調子のものではなく、1780年の反カトリック騒乱を描いた『バーナビー・ラッジ』を扱う第三章では、同じ「眠りを妨げられる」というパターンが暴力に対する批判として機能すると分析されている。

作品と作者の実人生を結びつける伝記的な視点からの興味深い指摘は、『リトル・ドリット』に関する第四章においても観察される。論者はこの小説では睡眠時に見る夢と覚醒状態において見る夢が共に重要な役割を担っていると述べ、後者に関して、ディケンズがこの作品を執筆する直前、昔の恋人マライア・ビードネルと再会し、幻滅し夢破れたという出来事を巧みに作品解釈に活かしている。加えて、ここには半ば覚醒状態にあるアフエリー・フrintウィッチの夢の詳細な分析があり、この半覚醒状態の夢というモチーフが、第五章において、ディケンズの遺作『エドウィン・ドルードの謎』の冒頭にあるアヘン夢から覚めつつあるジャスパーの描写へ、さらにはディケンズ自身の創作過程へと見事にたどられていく。ロバート・バスが描いた有名な「ディケンズの夢」という絵はこれまで眠っているディケンズが自分の創り出した人物たちを夢見ているところを描いたものだと思われてきたが、論者は絵の中のディケンズの目がうっすら開いていることを指摘し、これこそジャスパーやアフエリー、あるいは遡ってオリヴァーにも見られる半覚醒状態と同じものであると推定する。もちろんこれは仮説の域を越えるものではないが、本論全体を読んだ後ではかなりの説得力を持つ、魅力的な仮説である。

このように、本論には見るべきところが多々あるものの、短所もないではない。テキストにおける「眠り」の要素を追究するのに熱心なあまり、さほど重要でない細部にまで意味を読み込んだり、睡眠という現象に関する自明の事柄に紙数を割いているような印象を与える箇所がいくつか観察される。とはいえ、もちろんこれは論文全体の価値を著しく低下せしめるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年9月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。